このコーナーでは、この地域に伝わる民話を紹介し、皆さんからの感想画を募集しています。紹介する民話は、子どもたちに、ふるさとの伝説や昔話を教え、少しでも遠い祖先の心や、郷里の土地のぬくもりを感じてほしいと、松浦市教育委員会が平成4年に再編した「松浦の民話」という本から引用した話です。

松浦の民話⑨
横辺田の大蛇退治

むかしむかし、上志佐横辺田の山崎というところに、大きな池がありました。

ある日のこと、近くのむすめが、池であらい物をしていますと、それはそれは、大きな大蛇が水の中から出て来ました。そして、あっというまに、むすめを飲みこんでしまいました。↘

親は、とてもなげき悲しみましたが、「いやいや、いつまでなげいていてもしかたんなか。どぎゃんかして大蛇を退治して、むすめの供養をせんば。」と考え、近くの村人たちと力を合わせて、池の水を大川に流してしまいました。↖

住みかを失った大蛇は池のそばの大木に登りました。

すると、空が真っ暗になったかと思ったら、大風がふき、かみなりまで鳴り出しました。村人たちは、あまりのすさまじさに外に出ることができません。

これを聞いた殿様が、家来の池筑後という人に、大蛇退治を命じられました。筑後はすぐ家に帰って、よろいかぶとを身につけ、弓矢を持ちました。そして、四十四人もの家来を連れて、山崎の池に大蛇退治に行きました。

池に着いて、

「大蛇は。」

と見ると、大木に巻きついていました。その大蛇の目はするどく、らんらんとかがやいて、鏡のように不気味に光っていました。筑後は大蛇の近くまで行きました。

そして、弓に矢をつがえて、きりきり引きしぼり、

「南無日輪摩利支尊天。」

と、いのりながら、矢を放ちました。すると、見事、大蛇の目につきささりました。矢に当たった大蛇は池に落ち、上に下にとのたうち回りました。

「よれや、者ども。」

という筑後のかけ声で、数十人が池に集まりました。そして、いっせいに池に飛びこみ、とどめをさしました。

その時の大蛇の長さは、十メートル近くもあり、一つの頭に八つの尾があったそうです。

城に帰って、殿様に事のしだいをくわしく報告した筑後は、

「あっぱれ。あっぱれ。よくやった。」

とほめられ、志佐の土地をごほうびにもらいました。

それが、今でも名前が残っている池成という所だそうです。

また、大蛇を退治する時、池の鳴る音が聞こえたので、池成という名になったともいわれています。

その後、大蛇のたたりがしばしばあるので、死がいを池の下の山にうめて、「八尾大明神」として祭りました。

今でも、池氏の子孫が祭っているそうです。

（志佐町上志佐）

■あなたの力作を募集！
―民話の感想画募集―

この民話を読んで感じた情景をイラストにして、必要事項を記入の上、左記まで持参、郵送またはメールにて送付してください。応募いただいたイラストは審査をし、上位のものを次の市報で紹介します。

【応募資格】住所、年齢、性別など何も問いません。どなたでも応募できます。

【イラストの規格】はがきまたはA4サイズ以内の白紙に絵の具やクレパスなどで書いたカラーのもの（色鉛筆の場合は濃く塗ってください）。

【必要事項】住所、氏名（ふりがな）、電話番号、年齢、職業（学校名）

※掲載する場合、ペンネームを希望する人は、ペンネームもご記入ください。

※はがきで応募される人は、必要事項を表の下部に記載してください。なお、いただいた個人情報は民話コーナー以外には使用しません。

【応募締切】12月10日（金）必着

【応募・問合せ先】
〒859-4598
松浦市志佐町里免365番地
松浦市まちづくり推進課
秘書広報係
☎0956-72-1111
Eメール=hisyo@city.matsuura.lg.jp

※福島支所、鷹島支所、そのほかの各支所でも受け付けています。

わたしたちの郷土 ―59巻―

中世の松浦（25）鷹島海底遺跡

蒙古襲来、弘安の役（1281年）に元軍は4千4百隻の船団で日本を攻めにきました。平成6年度の神崎港の緊急調査で、沈没した元軍の船で使用されていた碇（碇・錨）を9点検出しています。碇は船の必需品の一つで、船を停めておくために海に投げ入れる重りです。9点のうち最も大きい3号碇は全長約7メートルに復元されており、碇にはロープの役割を持った竹索が、縛った状態で発見されました。竹索は幅3～5ミリの薄く割いた竹繊維を直径5センチほどに束ね、その上を同様の竹繊維で巻き上げていました。

竹索は、中国では竹のはしごや建築現場の足場の結束などに、日本では竹縄として、ワラ縄に比べて水に強く丈夫で、物を堅く縛れることから漁網・舟綱、麦藁屋根の結束などに使われており、危険な箇所や半永久的な用途に用いられていました。しかし、ナイロンロープなどの製品が普及し始める昭和30年代からは需要が減っていき、昭和50年代にはわずかに竹縄の製作技術が伝承されているに過ぎませんでした。

現在、国内で竹縄の製作技術が保存されているのは、埼玉県東秩父村で「竹縄技術保存会」として結成され、継承されています。

▲写真は３号碇に巻かれていた竹索

松浦の民話イラスト

読者の皆さんから寄せられたイラストの審査結果を以下の通りお知らせします。

先月の民話「売れない　あきない」のイラストに、3通の応募がありました。ご応募ありがとうございました。

【最優秀賞】
ペンネーム　エリザベスさん（志佐・上高野）
「おばあさんが、ぐずどんに優しく商いの仕方を教えている声が今にも聞こえてきそうな作品です」（はま）

【優秀賞】
ペンネーム　みきねっこさん（今福・仏坂）
「ぐずどんが茶と栗と柿をどのように売ったらいいのか悩んでる様子がよく分かる作品ですね」（はま）

【優秀賞】
ペンネーム　みかんさん（志佐・里田原２）
「かわいらしいぐずどんですね。色使いもきれいです」（はま）